

「ネパールの山旅、2009年」－ひっそりと佇む河口慧海記念館－

関西学院大学山岳会 南井 英弘

1. 09年秋、ロー・ムスタンにあるタシ・カン峰(6,386m)登頂の際、TBHにしたマルファ村(カリガンダキ河上流、ジョムソムの5km程南、アンナプルナとダウラギリの中間)の「河口慧海記念館」を訪ねた。

河口慧海師の集めた膨大な数の一切経・経典、仏像、仏画、仏具、マニ車、数珠、当時の生活用具、民具、旅道具、衣類など保管・展示されている。

1999年にマルファ村の人たちが

" In 1899, The Japanese Zen Monk adventurer and Pioneer Himalayan Traveller, KAWAGUCHI EKAI stayed with the headman of Marpha, ADAM NARYAN SUBBA, for three months before continuing his BUDDIST Pilgrimage to Lhasa. The People of Marpha feel honoured to have known this great man and would like to offer him our highest respects on the one-hundredth anniversary of his stay in this Himalayan Village."

という事でこの記念館を建設し、維持している。

河口慧海師は「仏教の原点たる真実の教えを解明したいとの望みから、サンスクリット(梵語)原典や漢訳よりも正確と言われるチベット語訳を入手し、読破するためチベット入りを志した。

当時、多くのヨーロッパ人達も隠密裏にラサ入りを企てていたが、河口慧海師は長い年月をかけネパール語やチベット語、民族・習慣を研究し、間道を抜けてチベット入り後も回り道をしながら遂にラサ入り第1号に成功した。

出来るだけ多くの方々に立ち寄っていただきたく、本日はご紹介いたします。

記念館を訪問したのは登山後でもあり、デジカメの電池も手薄になってからでした。沢山アップして撮りたい対象はありましたが、電池を温めたりして何とか撮れた写真です。取り残しが多かったことは言うまでもありません。

参考書物：『西藏旅行記』河口慧海

『河口慧海日記 ヒマラヤ・チベットの旅』河口慧海、奥山直司編

2. 09年に英国で発行された

"MAPPING THE HIMALAYAS Michael Ward and the Pandit Legacy"

著者 Richard Sale なる書物を日本山岳会図書室で手にした。

南下を狙うロシアとのグレート・ゲームが激しくなり、英国インド測量局はアフガニスタン、ネパール、チベット、ブータンなど地図の空白部分を埋めるため、自分達に変装してこれらの未開地に入ろうとしていたが、犠牲者が出るなど自力では不可能と悟った。その代わりにインド人をパンディットとして教育し、これらの僻地に送り込み、地図作成に当たらせた。

この書物には、パンディット達がどのように変装して未開の地域に入りこみ、どのようにして地図作成に必要な情報を入手し、貴重なデータを持ち帰ったか、具体的に記されており、実に興味深い。

河口慧海師は1897年6月末神戸から出帆、8月3日、ダーズリン着、パンディットの一人・サラット・チャンドラ・ダース氏(*)を訪問し翌日からチベット語の勉強を始めている。

- (*) 数冊の書物と共に チベット・英語辞典 を発行。
- 1902年ラサから脱出後、河口慧海師はダース氏宅に投宿。
- 1916年日本の僧侶達の招きで来日。
- ラドヤード・キプリング著『キム』のモデル。

20人前後のパンディットが活躍した1863～1892年から10年足らずの内に、河口慧海師はチベット入りしている。河口慧海師の服装、旅姿、所持品、生活用具などを「記念館」の展示品で見っていたので、パンディットの隠密行動や入手情報の保管方法など理解し易かった。

ご参考まで・・・仏教徒のパンディット達への教育内容。

初期はパンディット各々の歩幅を測っておき、歩いた歩数から距離を割り出したが、後に彼らの足首に紐を括って平坦地、登り道、下り道のどこでも、1マイルを2,000歩(一步が80cm)で歩くように特訓した。仏教徒のパンディットは巡礼者に変装し、数珠球を108個から100個に減らして「オムー・マニ・ペメ・フムー」と繰り返し唱え歩きながら、100歩で一つ数珠球を動かした。数珠球が1回転すると10,000歩(5マイル)を歩いたことになる。

巡礼者はマニ車を手を持って回しながら歩いており、マニ車の中には経文が書かれた巻紙が入っている。パンディットたちは、この巻紙に毎日の行動を記録した。

方位計はコンパスと共にマニ車の中に隠し、傾斜計と一体化したコンパスで道などの傾斜角度を計った。

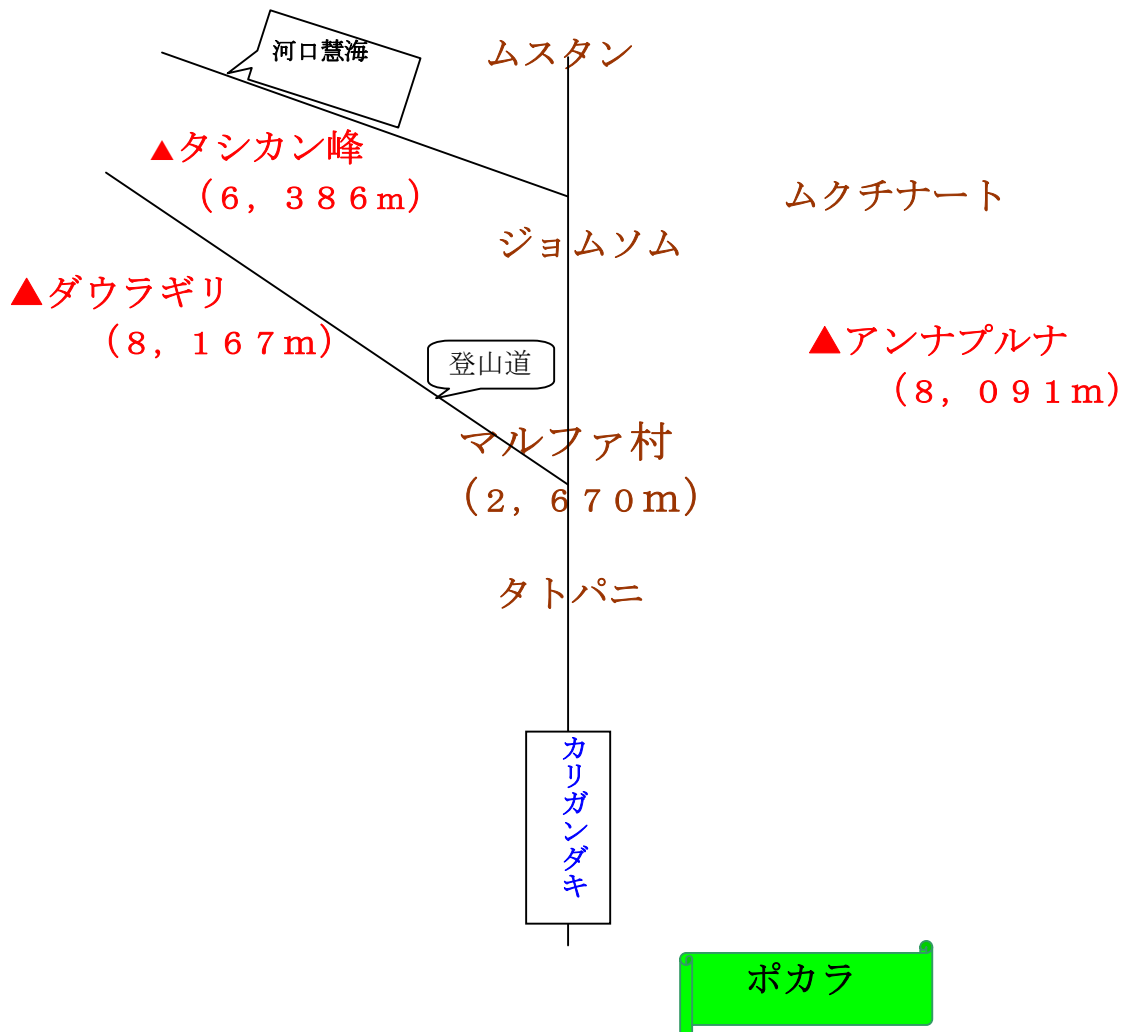
温度計は杖の中に隠した。気圧の変化で水の沸点は変化するが、おおよその高度は計測できた。通常、巡礼者は運搬箱も持ち歩く。そこでパンディットたちは運搬箱を2重底にして、六分儀を隠し緯度を測った。また水平盤を得る為に水銀も持参していた。この水銀は貝殻内にワックスでシールして、水筒の中に隠した。経度測定器を用いた人もいたが、起伏の多い長旅の運搬時に壊れやすく、経度は歩数資料から読まれることが多かった。

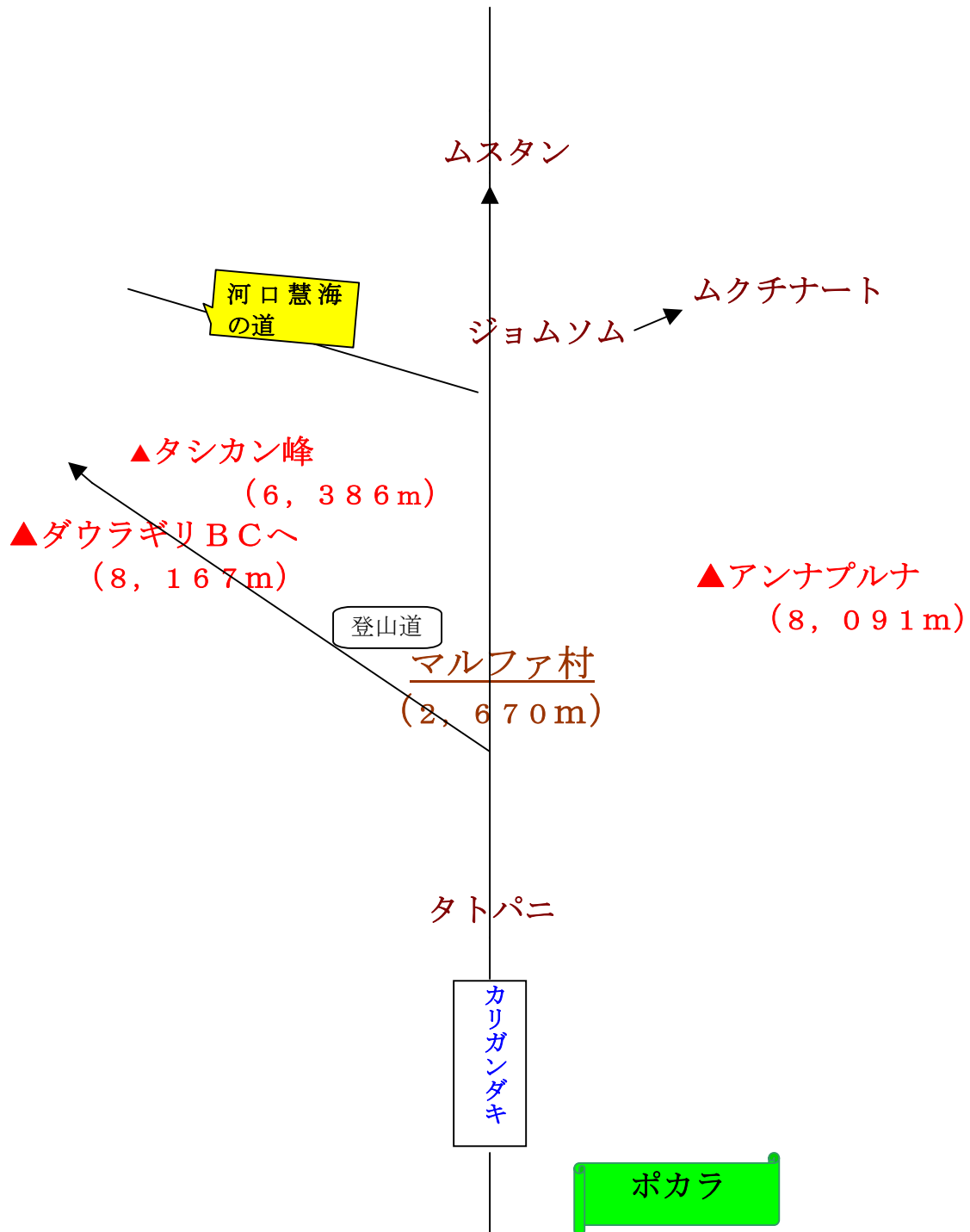
更に、位置の決定に星座の知識も教えられていた。彼らの地図が如何に正確であったか。後にパンディットがチベット北部と東部4,500kmを4年半かけて踏査し作成した地図の誤差は1%以内であると評価された。 以上

2009年9月10日~10月16日

西ネパール、ロー・ムスタン
Tashi Kang 峰 (6,386m) 登山
河口慧海記念館

南井英弘





ポカラからマルファまで約60km。

マルファからジョムソムまで約5km。

マルファはカリガンダキ河沿いの巡礼者と交易業者の宿場として栄えた長さが約400mの村である。

カリガンダキ街道が一段と狭くなり全ての人家、寺院がこの街道に面しているといっても過言ではない。

マルファ村内の街道は全面、白い大きな石畳が敷き詰められ、その下には山から引いた清水が流れている。街道の埃やゴミはこの流れに洗い流されるので平素からゴミ一つ無く清潔な感じだ。

「河口慧海記念館」はその街道の中ほどにあり、街道の山側に面している。